

『源氏物語』 紅葉賀巻の光源氏と源典侍

—— 助詞「や」の両義性が導く恋物語 ——

外山 敦子

はじめに

『源氏物語』のいわゆる「をこ」なる人物として源典侍の存在がある。彼女は六十近い年齢でありながら、当代一の貴公子光源氏に恋をする好色な女性で、その特異なキャラクター設定と唐突な登場の仕方が、従来様々に論じられてきた。

現在までの源典侍研究を概観すると、源典侍の登場で、紅葉賀巻が突如滑稽話へと転ずることの違和を合理的に解釈しようとした成立論・主題論⁽¹⁾にはじまる。その後は、一見唐突ともみえる光源氏との寸劇を、滑稽話として解釈するだけでなく、『源氏物語』全体のなかにいかに位置づけていくかを論じた構造論へと移行していった。それは、源典侍の登場に若紫の君が深く関係しているとして、二者の際立った対照性を見出した論⁽²⁾、『源氏物語』の主題のひとつである藤壺・朧月夜との密通事件が、源典侍によって照射される仕組みになっていることを指摘した論⁽³⁾、源典侍が天照大神に仕える巫女として、六条御息所と同根の物語に生き、柏木の密通を予兆する役割を演じているとする論⁽⁴⁾、末摘花との共通性・対照性を見出した論⁽⁵⁾など多岐にわたっている。ほかにも、源典侍を日本の文学史に連綿する〈姫物語〉〈烏澁物語〉の系譜に位置づけようとする論⁽⁶⁾、光源氏の「まれ人の王者性」を浮き彫りにする巫女の役割を果たしているとする論⁽⁷⁾などがある。

このように、源典侍と光源氏の恋愛烏澁話が、物語全体のなかでいかなる意味を持つかは繰り返し論じられてきた。しかし、源典侍と光源氏との関係がいかにして（あるいは、なぜ）成立し得たか、という問題については、実はあまり積極的に論じられてこなかったのではないか。源典侍をめぐる物語は、『岷江入楚』が「私云伊勢物語に思ふをも思はぬをもけちめみせぬといへる心歟⁽⁸⁾」と注し、村井順が共通性を指摘したように⁽⁹⁾、『伊勢物語』第六十三段の「つくも髪」を源泉のひとつとしていることが、現在ほぼ定説となっている。そのため、源典侍と光源氏との恋愛の成立過程もまた、「つくも髪」の老女と「在五中将」の恋愛の成立過程がそのまま投影されているものとする（思い込み）がわれわれには存在するのではなからうか。しかし物語の表現にそくしてみたとき、『源氏物語』紅葉賀巻の源典侍物語と『伊勢物語』第六十三段とは、登場人物の精神性や恋愛のありかたが大きく異なっていることが分るのである。以下、二人の関係の発端を描く紅葉賀巻を中心に詳述してみたい。

一 『伊勢物語』第六十三段の状況と「在五中将」の精神性

源典侍と光源氏の恋愛関係における最大の疑問点は、なぜ当代一の貴公子光源氏が好色の老女と契りを結ぶに至ったのかということである。それは、光源氏の動機を解明することにもつながる。従来は、その動機こそが『伊勢物語』第六十三段の影響下にあるものとされてきた。高橋文二は、「老女に対する『在五中将』の…引用者注」憐憫のありようなどは、『古事記』下巻の「雄略天皇」の条に載る、天皇と引田部の赤猪子との話を思い出させるものである」とし、そうした王朝人の理想とする統治者のありようが、光源氏に投影されると説明した⁽¹⁰⁾。また東原伸明は、光源氏と「在五中将」の共通性について次のように述べている。

光源氏と源典侍が共寝をする動機は、あくまでも彼女への同情からである。以前にも「へ齡のほどいとほしければ、慰めむ」と思せど、」（411頁）「十日本古典文学全集『源氏物語 一』（小学館）頁数：引用者注」とあつて、やはり彼女の年齢に同情している。この老女への同情は、たしかに

「かうかうなむ思ふ」といひければ、あはれがりて来て寝にけり。（中略）とよみけるを、男、へあはれ」と思ひてその夜は寝にけり。世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

（日本古典集成 76頁）

という『伊勢物語』の「男」の精神を継承しているといえる。⁽¹¹⁾

高橋や東原によると、『伊勢物語』の「在五中将」と老女の関係は、老女に対する「在五中将」の同情・憐憫によるものであつて、光源氏と源典侍が共寝をする動機も、源典侍に対する光源氏の同情・憐憫によるものであつたと説明するのである。

そこで、あらためて『伊勢物語』第六十三段と『源氏物語』紅葉賀巻の源典侍物語の共通性を見出すために、まずは『伊勢物語』第六十三段の状況と「在五中将」の精神性を確認する。

昔、「情の深い男と関係を持ちたい」と願う老母の望みを叶えようとした息子が、狩をしていた「在五中将」に「かうかうなむ思ふ」と事情を説明すると、「在五中将」は「あはれがりて」老母と夜を共にした。その後、男の訪れは途絶える（「さてのち、男見えざりければ」）。しかし、夜離れを嘆いた老母の「さむしろに衣かたしき今宵もや恋しき人にあはでのみ寝む」という和歌を聞いた男は「あはれと思ひて」再びその夜だけは共寝をした（「その夜は寝にけり」という話である）。

この章段における、老女と「在五中将」の関係性の特徴を二点挙げておく。第一に、この二人の関係は、女（側）からの働きかけに男が応じたという点である。この物語のなかで、老女と「在五中将」は二度夜を共にしているが、これは二

度とも、老女（側）の行動力によるところが大きい。一度目は、老女の息子が男に事情を説明しているので老女のかかわりは間接的ではあるが、二度目の場合は、夜離れを嘆いた老女が、男の家を垣間見するという大胆な行動にでており、かなり積極的である。

第二に、こうした女（側）からの積極的な働きかけに対して、男は「あはれがりて来て寝にけり」「あはれと思ひてその夜は寝にけり」というように、「あはれ（がる）」という感情からそれに応じている点である。一度目の「あはれがる」について、諸注釈書は①老母の願いを叶えようとする息子の心に「同情」した、②男を思う老女に「同情」した、③老女と息子の両方に「同情」した、という三つの解釈に分かれているが、「あはれがる」が「同情」という意味で用いられていることについては一致している。二度目の「あはれ」に関しては、「気の毒に思つて」⁽¹³⁾「憐憫のあまり」⁽¹⁴⁾「かわいそうに」⁽¹⁵⁾など、表現に多少の違いはあるものの諸注ほほ一致した解釈である。ちなみに、先述した高橋文二論文では「憐憫」、東原伸明論文では「同情」という表現を使用しており、現在のところ、解釈に大きな隔たりはないと判断できよう。つまり、男は老女を愛しいと思つて共寝をしたのではない。あくまでも「同情」「憐憫」の気持ちからなのである。それは、この章段の末尾に「世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける」とあるところからも明らかである。「在五中将」は、色好みの常として「思はぬ」人（＝この章段の老女のように、愛情を抱くことができない女性）に対しても差別せずに扱う心を持つていた。だから老女と夜を共にしたのだ。第六十三段の末尾は、そう説明しているのである。

【伊勢物語】第六十三段の老女と「在五中将」の関係性からは、①女から男への積極的な働きかけ、②男が女に対して「あはれ（がる）」という「同情」「憐憫」の情から女の思いを受け入れた、という二つの特徴を見出すことができた。では、従来【伊勢物語】第六十三段の影響下にあるといわれる【源氏物語】紅葉賀巻の源典侍と光源氏の関係性にも、この二つの特徴を見出すことはできるのだろうか。次章で確認していきたい。

二 「源氏物語」紅葉賀巻の状況と光源氏の精神性

「源氏物語」紅葉賀巻の源典侍物語は、優れた女性があまたひしめく桐壺帝後宮の様子や、たとえ女房相手であつても適当にあしらつて浮気めいたことをしない光源氏の女性関係から語られ、その後源典侍の紹介へと展開していく。

(a)年いたう老いたる(b)典侍、(c)人もやむごとなく(d)心ばせありて、(e)あてに(f)おぼえ高くはありながら、(g)いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるまで、などさしも乱らむといぶかしくおぼえたまひければ、戯れ言いひふれてころみたまふに、似げなくも思はざりける。あさましと思しなから、さすがにかかるもをかしうて、ものなどのたまひてけれど、人の漏り聞かむも古めかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女はいとつらしと思へり。

上の御梳櫛にさぶらひけるを、はてにければ、上は御桂の人召して出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍常よりもきよげに、様体頭つきなまめきて、装束ありさまいとほなやかに好ましげに見ゆるを、さも古りがたうもと心づきなく見たまふものから、いかが思ふらんとさすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならずあがきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。

「紅葉賀・三三六―三三七頁」⁽¹⁶⁾

源典侍は、(a)老齡の、(b)典侍で、(c)家柄が高く、(d)才気があり、(e)品格も備わっていて、(f)周囲の人々から高く評価されてい「ながら」、(g)ひどく好色で、その方面では思慮が欠けている。三谷邦明が指摘するように、源典侍は(b)から(f)までの正性と、(a)または(g)という負性を併せ持つ人物であることが冒頭で示されており、この紹介文だけで彼女の輪郭はほぼ理解できるようになっている。⁽¹⁷⁾ここで、正性と負性という相反する属性は、「ながら」という助詞によってひとつに結びつけられ、源典侍という特異な人物を説明している。対極にあるふたつの属性が融合した人物＝源典侍。彼女を中心とす

る物語は、その後も「ながら」という助詞が極めて重要な役割を果たしていくのである。

源典侍の人物紹介の次は、光源氏による源典侍評が語られるのだが、ここにも助詞「ながら」が使用されている点に注意したい。光源氏は「あさましと思しながら、さすがにかかるをかしうて」、「さも古りがたうも心つきなく見たまふものから、いかが思ふらんとさすがに過ぐしがたくて」と、源典侍を評価する。光源氏は「あさまし」「心つきなし」といったんはマイナス評価するが、しかし一方では「をかし」「過ぐしがたし」と思い、彼女の存在を無視できないでいる。つまり、光源氏にとつての源典侍は、あきれた不愉快な存在であり「ながら」、しかし「さすがに」見過ごすことはできない魅力の持ち主として登場しているのである。

そして、この源典侍への興味が、部分「戯れ言いひふれてこころみたまふ」「ものなどのたまひてけれど」「裳の裾を引きおどろかしたまへれば」という光源氏の行動の直接的な要因となつている点に注目したい。光源氏の関心は、桐壺帝後宮の、容貌気だてが優れ、かつ教養もある大勢の女房たちではなく、源典侍だったのであり、光源氏は源典侍の興味を積極的に行動へと移している。つまり、源典侍と光源氏の関係は、「男からの働きかけに女が応える」ことではじまっているのだ。この点からしてすでに、源典侍と光源氏の関係性は、『伊勢物語』第六十三段とは様相を異にしている。前章で述べたとおり、『伊勢物語』第六十三段は、老女側からの積極的な働きかけに男が応えることが特徴だった。しかし、源典侍と光源氏の関係は、光源氏の連続した積極的な働きかけに源典侍が応ずる形で始まつており、源典侍に「つくも髪」の老女ほどの積極性は見出せない。『伊勢物語』第六十三段の特徴のひとつ、「女から男への働きかけ」という点は、源典侍と光源氏の間には当てはまらないのである。

次に『伊勢物語』第六十三段の特徴の二つ目、「男が女に対して「同情」「憐憫」の情を抱く」という点について確認しておきたい。前章で引用した東原論文は、「光源氏と源典侍が共寝をする動機は、あくまでも彼女への同情からである」として『伊勢物語』第六十三段との共通性を指摘しており、その根拠に次の箇所を挙げていた。

齡のほどいとほしければ慰めむと思せど、かなはぬものうさにいと久しくなりにけるを、(後略)「紅葉賀・三三九頁」東原論文が引用した『源氏物語』本文は、傍線部分「齡のほどいとほしければ慰めむ」のみであった。この部分、たしかに光源氏は、源典侍の「齡」を気の毒がり、何とか喜ばせてやりたいと思つてはいる。しかしこの箇所は、直後に逆接の接続助詞「ど」を伴つて「かなはぬものうさにいと久しくなりにける」へとつながる文脈のなかで機能しているのだ。光源氏は、源典侍が年寄りであることを気の毒に思い、喜ばせてやろうと思うのだが、そうはいうものの気が進まないまま日数だけが過ぎてしまった。つまり、光源氏は、源典侍に対していったんは同情するものの、しかしそれが何ら行動へと結びつくことなくそのまま放置されるのである。前述した源典侍物語冒頭の、積極的な光源氏の行動力と比較すると、このときの光源氏の態度は対照的といえるだろう。光源氏にとつて源典侍は、興味の対象でこそあれ、同情の対象とはなり得ないのである。こうした光源氏の心情が、『伊勢物語』第六十三段の「在五中将」とは全く異なっていることはもはや説明するまでもなからう。老女への同情を「共寝」という行動で示した「在五中将」と、源典侍に同情はするものの何もできないまま時間だけを重ねる光源氏——。『伊勢物語』第六十三段と『源氏物語』紅葉賀巻の源典侍物語は、「理想的な貴公子と老女の恋」というモチーフを共有しながらも、実はそれぞれの登場人物の精神のありようや心の動きは対照的なのである。

三 光源氏のことばの両義性—助詞「や」の解釈をめぐって—

前章で、源典侍との恋愛関係のきっかけが光源氏側にあつたことは確認した。しかし、光源氏の積極性といつてもそれは「戯れ言」の範囲を超えるものではなく、かならずしも共寝に結びつくものではなかつたはずである。それが、温明殿での共寝、そして頭中将との立ち回りという顛末へと展開してしまうのは、光源氏が源典侍に「引きずられ、老女の誘い

にひきこまれていく⁽¹⁸⁾からというのが一般的な解釈であるが、果たしてそうか。実は光源氏は、自分の意識の範囲を越えたところで源典侍を求めている。彼は、源典侍とのやりとりのなかで、彼女に対する興味と欲望を無意識のうちに明らかにしているのである。

ある日、桐壺帝の御整髪に奉仕した源典侍のなまめかしい姿に興味を持った光源氏は、彼女の裳の裾を引き、そして扇を交換する。しかし、光源氏は、源典侍に興味があつて声をかけたものの、老女を相手にしているとところなど人に見られたくない。光源氏は途中から源典侍とのやりとりを早々に切り上げようと必死になる。

〔源典侍〕君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも

と言ふさま、こよなく色めきたり。

〔光源氏〕「笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ

わづらはしさに」とて立ちたまふをひかへて、(後略)

〔紅葉賀・三三八頁〕

源典侍は、自分を「下葉」に喩えて、「あなたがおいでくださるなら、あなたのお手ならしの馬に草を刈つてご馳走しましょう。盛りを過ぎた下葉ではありますけれども」と積極的に光源氏を誘う。すると光源氏は、「いつだつて多くの馬が慕い寄つていくらしい森の木隠れのあなたのところですから、私があなたに逢いに行つたら、他の人が見咎めるでしょう。それが面倒なのです。」と応酬する。光源氏は源典侍に、修理大夫をはじめとするあまたの男たちが通つていふことを持ち出し、その男たちに見咎められるのが煩わしいから行きたくても行けないとすることで、何とかその場をうまく収めて席を離れたのである。

ここで、光源氏の歌中「人や咎めむ」の助詞「や」に注目したい。現在までの諸注釈書は、この部分について「人が見咎めるだろう」⁽¹⁹⁾、「人が気づくだろう」⁽²⁰⁾など、多少表現の相違はあるが「や」を間投助詞と解釈する見解で一致している。

ところが、この助詞「や」は、一方で反語の係助詞と解釈することも可能なのだ。すると光源氏の和歌の意味は、「あな

たのもとにはいつでも多くの男たちが慕い寄っているらしいが、もし私があなたに逢いに行つたところで他の男が私を咎めるだろうか、いや誰も咎めはしない。」となり、光源氏の絶対的な自信と、それゆえに源典侍との契りを強く切望する和歌に変貌してしまふのだ。つまり、一見源典侍の誘いをうまく回避したかのように解釈できるこの光源氏の歌には、実は光源氏自身さえも気づかない欲望を包含しているのである。むろん、和歌の直後に「わづらはしさに」とあることから、光源氏は前者の意味で返歌したのは自明のことであり、その裏側に源典侍との契りを望む気持ちなどいささかもなかつたことは疑う余地もない。源典侍自身も、光源氏の返歌から「拒絶」を読みとつたからこそ、立ち上がった彼を引き止めて薄情を恨んでいるのであつて、後者の意で解釈した形跡は見あたらない。しかし、ここで重要なのは、光源氏の和歌が當事者たちの思惑とは無関係なところで、相反するもう一つの解釈を許容してしまふことなのだ。前述したように、光源氏は源典侍を「あさまし」「心づきなし」と思い、「ながら」、無視することができず、彼女に近づいていった。それに照応するかのように、光源氏は、源典侍と深い関係になるつもりはないと返歌しながら、実はその深層には、彼自身も気づかない共寝への欲望が渦巻いていたのである。そして、その内なる欲望こそが、後日現実の出来事となつてしまふ。光源氏の和歌は、図らずも後の物語展開を胚胎するのである。

夕立のなごりで涼しくなつたある日、温明殿のあたりを歩いていた光源氏は、琵琶を弾きながら催馬楽「山城」を謡っている源典侍を見つめる。自然にその場の雰囲気に取り込まれて、光源氏は催馬楽「東屋」を朗詠する。

東屋の 真屋のあまりの その雨そそき 我立ち濡れぬ 殿戸開かせ

鏡も 鏡もあらばこそ その殿戸 我鎖さめ おし開いて来ませ 我や人妻

(21)

女のもとを訪れ軒先で雨に濡れてしまつた男が、女に戸を開けるよう頼む。すると女は、掛けがねもないのだから早く開けて入つていらつしやいと男を誘引する内容の歌謡である。光源氏は、夕立の後という情景と、源典侍が直前に謡つていた「山城」に合わせてこの催馬楽を謡つた。当時こうした露骨な歌謡に対して、女性には応じないのが普通であつたから、

(22)

光源氏は本気で源典侍に契りをせまろうとしていたのではなく、その場の雰囲気に応じた風流というだけの行為として「東屋」を朗詠したのである。

ところが源典侍は光源氏の予想を裏切り、後につづけて「おし開いて来ませ」と謡ってしまふ。さらに、うろたえる光源氏に追い打ちをかけるように、源典侍は「立ち濡るる人しもあらし東屋にうたてもかかる雨そそきかな」「紅葉賀・三四〇頁」という和歌を自分から詠みかけるのである。「私には「東屋」のように尋ねてきてくれる人がいない」と嘆く源典侍の歌は、催馬楽「東屋」を下敷きにしつつその内容を否定するという女歌の常套表現を用いたものだった。⁽²³⁾この流れでは、応ずる光源氏の和歌は、同じく催馬楽「東屋」の内容をふまえた上で、女への愛の深さを訴えるものでなくてはならないのだ。

しかし、実際の光源氏の和歌は「人妻はあなわづらはし東屋の真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ」「紅葉賀・三四〇頁」というものであった。「人妻はなんとも面倒でして、あなたの軒先にも馴れ馴れしく近づくことはしません。」という内容のこの歌は、「東屋」に即してはいるものの、その内容は「東屋」を回避しようとしたもので、光源氏は完全に及び腰になっているのだ。しかも、この時光源氏は取って代わって催馬楽「東屋」に両義的な表現を見出だすことで、催馬楽世界をはぐらかそうとしているのである。「東屋」の末尾「我や人妻」の助詞「や」は反語で、「私は他人の妻ではありません、あなたのものよ」⁽²⁴⁾という意である。つまり、源典侍は「私（源典侍）はあなた（光源氏）のものよ」という意味で「東屋」を謡ったのに対して、光源氏はこの「や」を問投助詞の意で解釈し、「私（源典侍）はあなた（光源氏）のものではなく、他の人の妻です。」という意味を和歌中に採用することで、何とかして催馬楽世界を回避しようとしているのだ。自ら催馬楽「東屋」を持ち出しておきながら、慌てふためいてそれを和歌で撤回してしまったこの対応で、光源氏の色好みの面目は完全につぶれたといつていいだろう。これには光源氏自身も「あまりはしたなくや」「紅葉賀・三四〇頁」と反省し、結局この夜、とうとう光源氏は源典侍と契りを結ぶことになったのである。

光源氏は、興味本位で源典侍に声をかけたものの、彼女と深い関係になることまで考えていたわけではなかった。しかし、それが結果として契りを結ぶに至ったからといって、決してその原因が源典侍の積極性だけにあったわけではない。むしろ、源典侍と交わした光源氏自身のことば（表現）の内奥にその萌芽は存在していたといべきではなからうか。一度目は、光源氏自身は意識しなかった「や」の両義性が源典侍との未来の契りを暗示し、二度目は、源典侍から逃れるため、光源氏自身を作りだしたはずの「や」の両義性が裏目にて、結局暗示のとおり光源氏は源典侍と契りを結ぶことになってしまったのである。

おわりに

これまで、源典侍と光源氏の恋愛のありようや二人の精神性は、『伊勢物語』第六十三段「つくも髪」の老女と「在五中将」を継承したものと理解されてきた。光源氏が色好みの老女の誘惑に引きずられるままに契りを結んだ、つまり、源典侍が先導する恋愛関係だと認識されてきたのだ。しかし、物語はするように語ってはいない。逃れたい気持ちを一方向で抱えつつも、実際は光源氏自身のことばが源典侍を手繰り寄せ、彼のことばがさらなる関係性の発展へと誘引していったのだ。光源氏自身の意志や思考とは裏腹に、彼の発したことばは源典侍との関係を選び取っていくのであって、その意味において源典侍との恋愛はあくまでも光源氏先導だといえるのである。

注

- (1) 池田龜鑑は「源典侍に関する物語は、長篇の主流から離れ、異質的なものを感じさせる」とし(『日本古典全書 源氏物語 一』(朝日新聞社)三九五頁頭注)、次いで阿部秋生がその「異質性」の実体を分析し、紅葉賀巻の源典侍挿話はかなり後になって挿入されたものであると、成立の次元に関連づけて論じた(『光源氏の容姿』「東京大学教養学部人文科学科紀要」第四輯、一九五四年二月。↓「光源氏論—発心と出家—」、東京大学出版会、一九八九年八月)。ほかに、高橋和夫「源氏物語成立論—題」(『群馬大学文学芸学部紀要人文・社会科学編』七巻四号、一九五七年一月。↓改題「紅葉賀・葵両巻のある部分について」(『源氏物語の主題と構想』、桜楓社、一九六六年二月)、池田勉「源氏物語「紅葉の賀」の巻における異質的なものについて」(『国文学攷』第四二号、一九六七年三月。↓「源氏物語試論」、古川書房、一九七四年一月)、伊藤博「源典侍挿話の周辺—紅葉賀・花宴断想—」(『文学論輯』第一八号、一九七一年三月。↓「源氏物語の原点」、明治書院、一九八〇年十一月)などがある。
- (2) 玉上琢彌「源氏物語評釈二」(岩波書店、一九六五年一月)、藤村潔「源典侍の場合—源氏物語作者の方法—」(『藤女子大 学国文学雑誌』第七号、一九六九年一月。↓「源氏物語の構造二」、赤尾照文堂、一九七一年六月)。
- (3) 三谷邦明「源典侍の物語」(『講座源氏物語の世界 第二集』、有斐閣、一九八〇年一〇月)。↓改題「源典侍物語の構造—織物性あるいは藤壺事件と臘月夜事件—」(『物語文学の方法Ⅱ』、有精堂、一九八九年六月)、小嶋菜温子「光源氏の〈犯し〉をめぐって—源典侍挿話と「をこ」—」(『日本文学』第三七巻第二号、一九八八年二月)。↓改題「源典侍と臘月夜」(『源氏物語批評』、有精堂、一九九五年七月)。
- (4) 久富木原玲「天照大神の巫女たち—六条御息所、そして源典侍—」(『新物語研究3』、有精堂、一九九五年一月。↓「中 古文学研究叢書5 源氏物語 歌と呪性」、若草書房、一九九七年一〇月)。
- (5) 藤本勝義「源典侍—未摘花との連繫—」(『源氏物語作中人物論集』、勉誠社、一九九三年一月。↓「源氏物語研究叢書2 源氏物語の人—ことば文化—」、新典社、一九九九年九月)。
- (6) 小林茂美「源典侍物語の周辺」(『源氏物語序説—王朝の文学と伝承構造I—』、桜楓社、一九七八年五月)。
- (7) 鈴木日出男「源典侍と光源氏」(『國語と國文學』第八二〇号、一九九二年四月)。
- (8) 引用は、中野幸一編「源氏物語古註釈叢刊 第六巻 岷江入楚 自—桐葉至—花散里」(武蔵野書院、一九八四年六月)四一九頁。
- (9) 「紅葉賀」の巻(『源氏物語評論』、明治書院、一九四二年二月)。
- (10) 「宮廷の風雅—紅葉賀・花宴—」(『國文學』第三二巻第一三号、一九八七年一月)。

- (11) 「源典侍物語の（噺）―催馬楽「石川」引用と烏譚劇の寓話的解釈」（『國文學』第三八卷第一一〇号、一九九三年一〇月）
- (12) 主要な注釈書のうち、①の解釈を採用しているのは、松尾聡『新註伊勢物語』（武蔵野書院、一九五二年）、窪田空穂『伊勢物語評釈』（東京堂、一九五五年）、大津有一・築島裕『日本古典文学大系 伊勢物語』（岩波書店、一九五七年）、片桐洋一『伊勢物語の研究「研究篇」』（明治書院、一九六八年）、上坂信男『伊勢物語評解』（有精堂、一九六八年）、中田武司・狩野尾義衛『伊勢物語新解』（白帝社、一九七一年）、森野宗明『講談社文庫 伊勢物語』（講談社、一九七二年）、森本茂『伊勢物語全釈』（大学堂書店、一九七三年）、阿部俊子『講談社学術文庫 伊勢物語全訳注』（講談社、一九七九年）、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院、一九八七年）、秋山虔『新日本古典文学大系 伊勢物語』（岩波書店、一九九七年）。②の解釈を採用しているのは、岸田武夫『伊勢物語評解』（白楊社、一九五〇年）。③の解釈を採用しているのは、福井貞助『日本古典文学全集 伊勢物語』（小学館、一九七二年）、同『新編日本古典文学全集 伊勢物語』（小学館、一九九四年）である。
- (13) 福井貞助『新編日本古典文学全集 伊勢物語』（小学館、一九九四年二月）。
- (14) 秋山虔『新日本古典文学大系 伊勢物語』（岩波書店、一九九七年一月）。
- (15) 渡辺実『新潮日本古典集成 伊勢物語』（新潮社、一九七六年七月）。
- (16) 引用は、『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）に拠る。なお、私に傍線等を付し、下に巻名と頁数を記した。
- (17) 前掲（3）、「源典侍の物語」（『講座源氏物語の世界 第二集』、有斐閣、一九八〇年一〇月。→改題「源典侍物語の構造―織物性あるいは藤壺事件と朧月夜事件―」、『物語文学の方法Ⅱ』、有精堂、一九八九年六月）。
- (18) 木船重昭『源氏物語の表現―源典侍物語の場合―』（『平安文学研究』第五二号、一九七四年七月）。
- (19) 石田稷二他『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社、一九七七年七月）。
- (20) 柳井滋他『新日本古典文学大系 源氏物語』（岩波書店、一九九三年一月）。
- (21) 引用は、『新編日本古典文学全集 催馬楽』（小学館、二〇〇〇年一月）に拠る。
- (22) 前掲（18）論文。
- (23) 鈴木日出男『女歌の本性』（『古代和歌史論』、東京大学出版会、一九九〇年一〇月）。
- (24) 白田甚五郎『新編日本古典文学全集 催馬楽』（小学館、二〇〇〇年二月）。

（博士後期課程四年）